

坂井徳三のみる中国の農民・苦力・職人

Peasants, Coolie and Craftsmen in China in the Early 1940s

as Seen by Sakai Tokuzo

戸塚麻子

TOTSUKA Asako

(令和二年十一月六日受理)

抄 録

坂井徳三(一九〇一—一九七三)は、詩人、小説家、翻訳家、評論家である。『左翼芸術』やナツプに参加する等、プロレタリア文学運動を行っていたが、風刺詩集『百万人の哄笑』(一九三六年)が発禁処分を受け、検束される。保釈で出獄後、中国へと脱出した。北京では華北交通社員会の機関紙『興亜』の編輯長、興亜院、北支那開發会社等に勤めつつも、国策に沿わない形で執筆活動を行っていた。『東亜新報』『北支那』等、北京や天津発行の日本語新聞・雑誌に、坂井のエッセイや小説を複数みることが出来る。

本稿では、天津で発行されていた綜合雑誌『北支那』、および善隣協会(東京)発行の雑誌『蒙古』に掲載されたエッセイを題材に、坂井の中国認識の一斑について述べてみたい。農民・苦力・職人について書かれたエッセイを対象に、坂井が中国のそれをどのように見ていたかについて考察してみたい。

キーワード：坂井徳三 中国認識 労働者 『北支那』 『蒙古』

はじめに

坂井徳三（一九〇一—一九七三）は、詩人、小説家、翻訳家、評論家である。田中益三は『絵筆とペンと明日—小野沢巨と仲間たちの日本／中国』¹のなかで、風刺詩集『百万人の哄笑』（時局新聞社、一九三六年五月）が出版と同時に発禁処分を受け、その後検束され、保釈で出獄し、そのまま日本を脱出して中国へと渡ったこと、張家口を経由して北京に入り、華北交通社員会機関紙『興亜』²の編輯長や北支那開発会社に所属したこと等を記している。中国でのさらに詳しい経歴については、拙稿「坂井徳三『北京の子供』と児童文学—日本占領下北京の日本語文学」³のなかで、新資料として『東亜新報』（一九四二年一月一七日）の記事を示したが、ここで再び引用する⁴。

筆者紹介 兵庫県人、本年四十二歳、早大英文科の出身で国民新聞学芸部長を辞してから文筆活動に入り、昭和十五年華北に來り、華北交通社員会機関紙「興亜」の編輯長、興亜院華北連絡部の物資対策委員会委員などを勤め、その後北支那開發調査局に入り、目下第二調査課で主として農村問題、労働問題を研究してゐる、その傍ら隨筆、童話などをよくし、「北京の子供」「支那イソツブ物語」などの著がある（傍点原文、以後同）

すなわち、北京に來てからは国策会社である華北交通の社員会雑誌の編輯長を務め、次に興亜院、そして国策会社の北支那開發

会社の調査局という経歴をたどったことがわかる。なお、一九四四年六月一五日発行の『北電』に本名「坂井徳三郎」がみえ、「北支那開發株式会社」所属として座談会に出席していることから、この時まで北支那開發にいたことがわかる⁵。だが、既に前掲の拙稿で指摘した通り、国策会社や興亜院に所属しながらも、坂井の当時の著作をみると、国策に沿うような言説を避けながら執筆を行っていたといえるのである。

本稿では、天津で発行されていた綜合雑誌『北支那』⁶および善隣協会（東京）発行の雑誌『蒙古』に掲載されたエッセイを題材に、坂井の中国認識の一斑について述べてみたい。現段階の調査では、坂井の中国に対する言説は、主に農業と工業、そして子供に関するものが多い。本稿では、農民・苦力・職人について書かれたエッセイを対象に、坂井が中国のそれをどのように見ていたかについて考察したい。

一 中国農民の世界

「現代と古代との関連」は、『北支那』第一〇巻第七号（一九四三年七月一日発行）⁷に掲載された。知人である「あなた」（または「君」）から届いた手紙への返信という形式で書かれている。二年前に「僕」は、知人の「双廟堡部落」調査に同行した。その部落の村長・「毛瑾大人」の家族について語っている。なお、「双廟堡部落」の場所はさだかではないが、「空際に長城の浮かんた黄土地帯の乾燥した部落」と説明されている。

「毛瑾大人」は「顔の表情にニコ／＼筋以外には持つてゐない

やうな好々爺」で「家族員四十一人の戸主」である。毛家は「門内に十四、五の屋子があり、そのなかに幾組かの夫婦・子供・孫が住んでる」という大家族で、分家を禁じているという。「僕」は、知人と「毛瑾大人」との会話を思い起こしながら、以下のように書きつづっていく。少し長いが引用する。

ちやーと、君が尋ねたのです、――持つてゐる畑の面積は増えないのに、人がだん／＼と増えて行けば、どうするのか？
それは――と、彼〔毛瑾大人……戸塚註〕が答へたのです、――この部落は農業で忙しいから、農繁期には他家へ雇傭労働にでも行くんだ、と。

「その収入は、どうしますか？」

「その収入は全部、家々収める。」

「もし出さなかつたら？」

「家から駆逐する。」

「もし子供が工場や礦山へ働きに行きたいつて云つたら？」

「それは場合によつたら許可しませう。」

「その質〔質〕銀も家に全部収めますか？」

「もちろんです。」

「収獲した穀物の自家で消費するもの以外は？」

「売ります、家長の手で売ります。」

「この大家族内に、もし家内でドロボーするものが現はれたら？」

「そんなものはない。」

「もし、あつたら？」

「なぐりますよ。」

「家内に牢屋はありませんか？」

「ありません。」

「相続は？戸主が死んだ時には、その子供が相続しますか？」

「ちがいます。戸主の次の弟が相続します。戸主の子供は相続しません。」

この会話から「僕」は、「中国の古い／＼時代」「共同体の匂」を感じ、次のように述べる。

このなかでは、家族員、或は一組の夫婦の主権は少しも認められてゐません、いつも全体へ従属するのです。経済的にも道徳的にも。彼らは、一定の土地の或る期間の分配をうけて、それを自己の生産的労働と自己の計算にもとづいて、衣食住の資料を獲得して行くといふ小形でもありません。土地も、労働も、計算も、分配も、この大家族の全体の一部としてだけ行は〔は〕れます。この大家族のなかの小家族は、だから、私有財産の上に立つてゐないわけですね。

そして、「僕」は、この毛家のケースでは、「中国の蒙昧時代や野蠻時代の共同体のそのまゝの形が残つてゐるわけでは」なく、「次の政治的な時代の制度へと変つて行つた過程上の種々な要素の残つてゐる所が、おもしろい」と述べる。

この毛家は、この部落で唯一の大家族で、「直接古代からつな

「がつてい」るかのような「時代錯誤」性をもっている。

他方、同じ部落の毛家以外の家族は、「分頭相続」、すなわち「所有土地を、農具を、家畜を、いや何もかもを、一切、兄弟間に平等に別けるといふ相続法」である。こうした「分頭相続制」もまた「中国の古い形の制度」であるが、毛家のケースとは異なり、「中国のあらゆる隅々まで行きとゞいてゐる」と述べている。そして、この制度こそが「農業の発展を阻害して来た」と言い、次のように続ける。

土地の無限の細分化・集中的経営の否定・無数の零細農・農業再生産の縮小、等々。もちろん、いろ／＼な理由と条件とが考へられなければならないわけですが、分頭相続制による土地の細分化が、また最も大きな作用をしてゐる事も事実です。

つまり、分頭相続により個々の農家の規模が細分化されていくことにより、中国の農業の発展が阻害されてきたし、現在もされている、と述べている。そして、各農家では、農繁期には非常な労働力不足となる一方、農閑期は非常な労働力過剰となり、また、一年を通してみると、「相当な食糧不足」という現状があると指摘する。そして、それらの根本的な要因は、分頭相続による「経営の細分化」にあると述べている。

以上のように、毛家の「時代錯誤」な「家族共同体」の「遺制」は、「直接に古代からつながる」「小宇宙」なるものであるとされている。それと一方では「紙一重の制度」^{*}とされつつ、対比

して描かれるのが、毛家以外の「部落の各農家」、さらには「中国のあらゆる隅々まで行きとゞいてゐる」「分頭相続制」である。そして後者は「農業の発展を阻害し」、「土地の無限の細分化」を促進してきた。その結果生み出されるのは、「無数の零細農」である。農業技術の発展があまりみられない状態で、農地が親から子に「分頭相続」されれば、当然農地は細分化されていき、農民も零細化することは免れない。そして坂井はこうした状況は中国のみにその責任があるのではなく、「アヘン戦争以来のヨーロッパ的な力の圧力」にもその要因があるとする。近代ヨーロッパの「圧力」と中国の「大昔から残つてゐる力」「共同体的遺制」とのせめぎあいのなかで、「無数の零細農」が生み出されていると坂井は考えるのである。

このエッセイで、坂井のペンは、約四分の三を毛家に費やされている。そのことから、「中国の古い／＼時代」「共同体の匂」のする、「直接に古代からつながる」「小宇宙」としての毛家のあり方に注目していることがうかがえるし、ある種の魅力を感じているといつてよいだろう。「私有財産」が認められず、「家族員、或は一組の夫婦の主権は少しも認められてゐない」、つまり個人が個人として認められないその在り方を諸手を挙げて肯定しているわけではない。しかし、分頭相続により細分化された農家が、成員みなが絶対的に窮乏化する悪循環に陥つてゐるのに対し、「毛瑾大人」に「中国の古代の伝説」の「王様」の幻想をみてもいる。と同時に、「直接に古代からつながる」「小宇宙」をユートピアとして夢想しつつ、それが現代世界では実際には力を持たず、「無数の零細農」が生み出され窮乏化していくことへの歯止めとはな

らないことも、坂井は考えざるを得ないのである。

二 「苦力」の世界

こうした「無数の零細農」は「苦力」と化していく。坂井は「長城下の農民」〔蒙古〕第八卷第一二号、一九四一年一月一日発行）²⁰のなかで、「農閑期を鉞山で苦力として働き、農繁期には郷村へ帰って農民として働く連中」を、「苦力＝農民」として描いている。苦力は元来農民であるが、「耕地不足」のため「農業収入」が不十分である。そのため「何等か他の方法によつて補充しなければなら」ず、その方法として「苦力労働が選ばれたのである。そして苦力としての労働に従事している者は、徐々に農民としての生活から切れてしまうと坂井は指摘する。

つまり苦力＝農民の耕地面積は一と月おかれて、前月の群のそれよりも更に輪をかけて小さくなつてゐるわけだ。だから次の月にはもつと小さくならう。そして最後には耕地を一切所有しないのみか、自分がその人生の経歴の第一歩を出発した農村とのつながりも、すつかり過去の苦力労働の埃のなかに埋没し忘却されてしまつた者のみが残る事になる。

こうして耕地を所有せず、土地から切り離され、故郷とのつながりも失い、出稼ぎの「苦力労働」に「埋没」するようになってしまふと坂井はいうのである。

そうした苦力の生活は非常に苦しいもので、生活環境も大変劣

悪である。坂井は「山の苦力小屋から」〔蒙古〕第八卷第八号、一九四一年八月一日発行）²¹において、苦力の生活の一端を書き記している。そのなかで、鉞山の苦力小屋について「動物的世界と紙一枚の恐るべき暗黒世界」と表現している。真っ暗で臭気が充満し、非衛生的で非人間的な環境に苦力たちは押し込められているとする。しかもその小屋の大きさは「苦力一人あたりの肩の幅を七〇センチに収めるといふ計算から割り出されてゐる」。つまり、「動物的世界と紙一枚」である苦力小屋は、自然にそのようになつたのではない、むしろ計算された非人間性ともいふべき世界なのである。

そうした「肩の幅七〇センチづつの自己の世界」に押し込められている苦力たちであるが、彼らの様子は「暗黒世界」とは程遠い、快活ともいふべき明るさに彩られている。真っ暗な小屋のなかで死骸のように横たわっているようでないながら、あちらこちらで会話があり、ときに「とつぜん笑ひ声」が起こる。

“ぢや、おめえ、兄弟はいくつだい？”

“二つ上だよ、おれより。”

“二つ上だと、いくつかな？”

“知らないよ！”

（ハ、ハ、ハ、と、あたりの皆の笑ひ）

（そばの誰かゞ、その年を数へてやる）

こうした会話は、簡単な計算をすることさえできない苦力の無知無学や、他の苦力による嘲笑が描かれているかのようにも受け

取ることができる。しかし、坂井の本意はそうではないだろう。こうした会話の直前に、さきほどの苦力小屋の計算された非人間性が執拗に描写されていること、また苦力たちの会話が湿り気がなく快活に活写されていることを考えれば、苦力を使役する側の計算された非人間性と、計算のできない苦力の人間らしさとが対比されていると読むことができる。

また、同エッセイの冒頭では、鉾山における苦力たちの集団的な動きが次のように描かれている。

やがて、太陽の光線が斜面と平行に、射ちおろされる。と、そのなかに、光線に逆らつて斜面を登つて行く苦力たちの姿が、長い影を曳きながら次々と現はれて来る。彼らは、あちらの小屋から、こちらの小屋からと、だん／＼出て来、ひつきりなしに、山のより高い方へと——場所によつては頂上に近い所まで——進んで行く。

間もなく、山ぜんたいが動きはじめる。

或る峰では腹のところに、或る峰では喉のところに、或る峰では胸から腰にかけて……穴があけられ、鉾石で赤くそまつてゐる。そこからサクガン器を使ふ機関銃のやうなひゞきが起り、次いでハツパがかけられ、そのひゞきが各峰々、谷々に吸ひ込まれると、すぐ赤い鉾石が掘り出される。一つの峰と谷をへだてた向ひの峰、これらが、各々、山ぜんたいにひゞき渡るだけの、この大きなひゞきや叫びで、挨拶したり、笑つたり、話しかけたり、一日中つゞけるのだ。

こうした描かれ方からは、苦力たちが集団として、群れや塊として捉えられており、あたかも人格などを持たない動物や昆虫のように描かれていると見ることもできる。さきの描写のあとで、遠くの斜面に「羊の群れが枯草を追つてゐる」様子が重ねられて、いることもその証左となるだろう。しかしここでは、苦力たちの動きが「次々と現はれて来る」「だん／＼出て来」「ひつきりなしに」などとリズムカルに連続するものとして描かれていることに注意したい。また、削岩機によって「機関銃のやうなひゞきが起」ってくるが、「この大きなひゞきや叫びで、挨拶したり、笑つたり、話しかけたり」が「山ぜんたいにひゞき渡り」「一日中つゞけ」られると表現されていることも重要である。こうしたリズムカルな動きの連続と、それによって沸き起る「ひゞきや叫び」による呼応とが苦力たちの労働によって生み出されていることを坂井は注視し、それを活力ある様子で描き出しているのだと解釈したい。ここでの坂井の視点は、苦力たちを単なる群れや塊のように冷徹に捉えるようなものではなく、いきいきとした生命のリズムを持つものとして捉えようという暖かなものが感じられるのである。

このような働く者こそが人間的であるというような坂井のまなざしは、特にものを作る者に対して強く向けられる。つぎに手工業者・職人についての坂井の捉え方を見てみよう。

三 職人たちの世界

「手工業の世界」は、『北支那』第九卷第九号（一九四二年一〇

月一日発行)に掲載された。友人「W君」へ語りかけるという形式のエッセイである。

爽やかな風に秋の訪れを感じつつ、「僕」は「東交民巷の並木道」(北京の天安門広場の東、当時各国大使館があった)を歩いている。そして「ヴェルハーランの「風の歌」を想起する。詩句を正確に思い出すことはできないが、「全体の構成、感触」を元に「ヴェルハーランふう」に言葉並べて行く。しかし、続いて「僕」の空想は、「ヴェルハーランの頬がけつして感じるこのなかつた東方の風」へと向けられる。「僕」には、「農具を作るかじやの槌」や「土布を織るはた」、「陶器を作るロクロ」等を楽しげに謳いあげる詩句が次々に思い浮かんでくるのだった。だが、そうした空想の過程で、それら手工業が「近代的機械工業」に「もうどうにも、それにいくらかの席をゆずらなければならない」ことに思いあたる。

そして、手工業が機械工業によって圧迫され、苦しめられると同時に、手工業が機械工業の発展を阻害してもいると述べる。

以上が「手工業の世界」の概要である。三頁ほどのこの短いエッセイのなかで、坂井は、手工業の魅力を謳いあげている。まずは、対比のため、「ヴェルハーランふう」とされている部分を引用する。

「今吹いて来た風はアルプスの風だ、牧草の甘い匂をたゞよはせてゐる。

今吹いて来た風はナポリからの風だ、イタリヤの若い恋のさゝやきが聞こえて来る。

今吹いて来た風はマルセイユから来た風だ、地中海の空の

青が輝いてゐる。……」

それに対し、続けて「東方の風」——ここでは中国・華北の風を指しており、日本等は含まれていない——は次のように描かれる。

「今吹いて来た風は宣化から来た風、農具を作るかじやの槌の音をひびかせてゐる。」

——とても／＼楽しい。それは快い、澄んだ金槌の音だ、大きい方の槌の音一つに、小さい方の槌音二つが答へる。それは二人のかじやで、今、カナシキの上でスキを造つてゐる。小僧が一人、フィゴにかゝつてゐる。この小さな手工業の工場は、きわめて小さく暗いけれども、何か「森のかじや」的な楽しさにみちてゐるやうだ。すみには、でき上つた農具が山とつんでゐる。

「ヴェルハーランふう」とされている部分が事実そうであるかはこのでは問わない。問題はそれとのパロディ、手工業の詩にある。まず最初に宣化(河北省張家口市)の手工業が描かれる。「快い、澄んだ金槌の音」や、「大きい方の槌の音一つに、小さい方の槌音二つが答へる」というような表現の中に、職人が懸命に働き、またその労働に喜びを感じている様子が表れているといえるだろう。それは、「何か「森のかじや」的な楽しさ」「でき上つた農具が山とつんでゐる」という表現からもうかがえる。坂井はこうした職人たちの仕事にユートピア的な幻想を見ていると

いえる。

「農具を作るかじやの槌の音」が「大きい方の槌の音一つに、小さい方の槌音二つが答へる」というようにリズムミカルに響きあい呼応している。それは「楽しい」「快い」「澄んだ」ものとして描かれる。ここで先に見た苦力たちの描かれ方を思い起こしたい。苦力たちの労働がリズムミカルな動きの連続として表現され、労働によって発生する「ひびきや叫び」が呼応しあっていたのと同じような表現がここには見られる。そして、苦力と職人との違いは、職人たちの労働がものを作る楽しさや喜びにあふれているように描かれている点である。苦力の労働からもリズムと呼応とが生み出されるように表現されていたが、それ以上に職人の労働から生み出される心地よいリズムと応答とは、あたかもダンスを踊っているかのように描かれている。職人たちが手を動かすことによつてリズムが生れ、そこからものが生み出されるようである。

続けて、同様に他の手工業が謳われる。「高陽からの風〔中略〕土布を織るはたの音」、「磁甌からの風〔中略〕陶器をつくるロクロ」の音、これに似た「博山のガラス手工業」、「北京の城壁のすぐ近く」で行われている「土法製粉の「磨坊」によるロバの「パタ、パタと云ふ」「軽い足音」と臼のゴトゴト鳴りつづける音。

ここで注目したいのは、「磁甌からの風」である。ロクロの音は次のように表わされている。

——ギイ／＼とロクロが鳴つてゐる。足がたえずリズムミカルな運動をつづけてゐる。その足の下をコホロギが飛び、コホロギの鳴声がロクロの音に調和する。ロクロの台の上では、

陶器師の慣れた手で見る／＼うちに、一塊の粘土から大きな壺が形づくられてゆく。

改めて指摘する必要もないだろうが、ここで坂井ははっきりと、職人たちの労働を「リズムミカルな運動」として捉えている。そしてそのロクロの音は、今度は「コホロギの鳴声」という自然の世界の声とも呼応し、「調和」しているのである。

同様に「博山のガラス手工業」では、「パタ、パタと云ふロバの軽い足音。〔中略〕眼かくしされたロバが、グル／＼と廻つてゐる。臼がゴト／＼と鳴りつづける。」として、職人の仕事とロバの足音、ロバが回る様子と臼が鳴る音がすべて呼応して響きあい、「調和」しているのである。

このように職人たちの仕事場では、労働によつてリズムが生まれ、人とモノと自然がハーモニーを奏でる。それは「美しく牧歌的な一つの世界」である。しかし、他方で、「美しく牧歌的な一つの世界」がユートピア的な幻想であることを坂井は認めざるをえない。すなわち次のように、このエッセイは終わっている。

それは機械工業の生産品の圧迫に悶え苦しみながら、同時にその膨大な絶対量を以て中国の機械工業の発展を阻害してゐる。まことに矛盾した複雑な表情が、その素朴を、楽しさと同時に、そこには湛えられてゐる。それは、おそらく、この世界をもつとも単純に素朴に、なぐり込み的に、写してゆく事によつて容易に掴みうるだらう。

坂井は、職人たちによる手工業に労働の手ごたえ、人々の思いを見出そうとしているといえる。しかし、そうした手工業に価値を見出しながらも、手工業は「近代的機械工業」に「もうどうにも、それにいくらかの席をゆずらなければならない」とする。なぜなら、「近代的機械工業」が成長することは中国が現代世界で発展し、豊かになり、生き残っていくために不可欠なことだからである。だが、手工業は「膨大な絶対量を以て中国の機械工業の発展を阻害して」もいるため、容易にすべてが機械工業に取って代わられることもない。そういった「矛盾した複雑な表情」を坂井は中国の産業の現状、ひいては中国社会の現状として見ているのである。

むすびにかえて

坂井は「手工業の世界」のなかで、中国が手工業から機械工業に転換していく様子を描いている。中国の発展のためには機械工業の発展が必要不可欠だが、手工業は「その膨大な絶対量を以て」機械工業の発展を阻害してゐる¹⁾。しかし手工業も「機械工業の生産品の圧迫に悶え苦し」んでゐる。そのような中国の現状を分析しつつも、他方で機械工業では味わえない、楽しい生産現場、労働の手ごたえと喜び、美しい生産品といったユートピア的な幻想をも捨てることはできない。こうした構図は、最初に見た「現代と古代との関連」における毛家の「直接に古代からつながる」「小宇宙」のユートピアと、「分頭相統制」による「無数の零細農」の析出とも通じる。現代世界においては、大家族主義的な共産

ユートピアも、手仕事の労働ユートピアも、美しい理想世界ではあっても現実の流れには無力である。「美しく牧歌的な一つの世界」は現代の「ヨーロッパ的な力の圧力」に踏みじられ、無力である。しかし「大昔から残つてゐる力」「共同体的遺制」は、また「純朴な手工業」が生み出す「膨大な絶対量」は「発展を阻害し」、中国社会を容易に現代世界に参入させない。坂井はユートピア幻想を捨てきれないまま、そのような苛烈な現状の前で答えや処方箋を見出せずに立ち尽くしているかのようなのである。

なお、引用文は、仮名遣いは原文のままとし、漢字は原則的に新字に改めた。また、脱字・誤植等があると判断される場合は、適宜()に入れて補った。

¹⁾ せらび書房、二〇一一年七月

²⁾ 『興亜』については神谷昌史・戸塚麻子『興亜』(華北交通社員会) 解題・細目(一)、『滋賀文教短期大学紀要』第二二号、二〇二〇年、一―一四、参照。

³⁾ 『教育実践報告誌』、第一巻第一号、一六五―一七四頁、二〇一七年。

⁴⁾ 『東亜新報』一九四二年一月一七日、朝刊二面「新春とガキ大将」に附されたプロフィール。

⁵⁾ 第六巻第六号、通巻第五七号。

⁶⁾ 八一―一五頁、座談会「通信戦力増強と勤労管理」。他に梨本祐平等が出席。ただし、坂井は一切発言していない。拙稿『北電』(華

北電電俱樂部／北電興亜会）細目』『論潮』第一三三号、九九一—四〇頁、二〇二〇年七月、参照。

③『北支那』については、拙稿『北支那』解題』（『戦前期中国関係雑誌細目集覧』三人社、二〇一八年、三三九—二四六頁）参照。四七一—五一頁。

④分頭相続（家産均分相続）については、満鉄調査部と東亜研究所によって行われた大規模な調査である農村慣行調査（一九三九年—一九四四年）において注目されている。また、満鉄や華北交通資業局に勤めていた水野薫のエッセイでも触れられている（みずの・かほる「分頭相続」『北支』第一〇号、一九四〇年三月。のち、みずの・かほる『北支の農村』華北交通社員会、一九四一年に所収）。坂井が独自に注目したのか、それともこうした調査・研究を参考にしているのかは不明である。

⑤この「紙一重」性については小林一美の以下の指摘が参考になる。「家産を均分するのが当然とする意識は、財産は家族全員のものであるとする家産共産主義の文化を母胎としている。家産共産の意識から数世同居という大家族共産性も生まれ、大家族共産性がまた小家族共産性を生みだし、更には共産だから絶対均分の権利があるという意識を生み出すのである。（中略）大家族主義と家産共産性と家産均分相続は同根であり、互いに深い表と裏の関係にあることは間違いない。」小林一美「家産均分相続の文化と中国農村社会」（路遥・佐々木衛編『中国の家・村・神々—近代華北農村社会論』東方書店、一九九〇年、二一頁）

⑥二二—二三頁。翌一二月に『北支那』第八卷第一二号に「長城下の鉞山苦力と支那農民の実態」と改題されて再録された。ただ

し、『北支那』版は誤字・脱字等が多く、数字の誤りもある。

⑦五四—六五頁。

⑧八〇—八二頁。

⑨「ヴェルハーランの「風の歌」を、高村光太郎は「風を称ふ」のタイトルで翻訳している。『高村光太郎全集』第一八卷（筑摩書房、一九五八年、三四二—三四四頁）。

*本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号18K00335 代表者・戸塚麻子）、並びに同（課題番号20K00357 代表者・竹松良明）の研究成果の一部である。